富岡鉄斎生誕180年記念

鉄斎

―われ、丙申に生まる―

平成28年9月6日[火]―11月27日[日]

前期　9月6日[火]―10月16日[日]

後期　10月21日[金]―11月27日[日]

10時～16時30分(入館は16時まで)

月曜日休館　ただし9月19日、10月10日は開館、翌日休館

53　南極仙図

73　扶桑神境図

鉄斎－われ、丙申に生まる－

近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）は、天保7年12月19日に生まれた。60年を周期とする干支では丙申（へいしん・ひのえさる）の年、生日は奇しくも鉄斎が敬愛した宋代の文人・蘇東坡と同じ日であった。

2　還暦祝寿図

還暦　還暦とは数え61歳を指す。十干と十二支を組み合わせた干支が一巡し、起算点となった年にふたたび還ることから「本卦還り」とも呼ばれ、別称に「華甲」がある。

明治29年（1896）1月1日、還暦を迎えた鉄斎は、60年に一度の丙申の年を祝して《還暦祝寿図》（No.2）を描いた。賛には「私は天保七年丙申に生まれたが、今年は還暦で、また丙申の年に巡りあえたことは嬉しい。子供らは我先にと祝ってくれる。そこで屠蘇酒をたくさん飲んでしまった」とある。二匹の猿が蜂を捕らえようとする図は、蜂が「封」、猿猴の猴が「侯」に字音が通ずることから「封侯図」、すなわち出世を意味する吉祥の画題として知られている。

こうした喜びの一方、亡妻達との間に儲けた長女秋が、この年の3月に29歳の若さで逝去する。兄伝兵衛の家を継いでいた秋が亡くなったことにより、富岡本家は断絶し、家系は分家の鉄斎一家だけとなった。鉄斎にとっての二度目の丙申の年は、人生の節目の年であったと推察される。

古稀　古稀とは70歳の称で、唐の詩人杜甫の詩「曲江」の「人生七十、古来稀なり」に由来する。

明治38年（1905）正月、古稀を迎えた鉄斎は、自らを寿老人に見立てた《朱寿老図》（No.11）を、清の高其佩の朱鍾馗の筆意に倣って描いた。賛には「飯を食い着物を着るという日常生活を繰り返して七十歳の正月を迎えた。書画の揮毫を生業として、何とかやっていける。天から賜った清福を受けて、それを楽しむことを知っている。私も太平の御世の寿老人なのだ」との自作詩を寄せ、「稀寿　鉄斎外史」と自署している。

前年3月、10年にわたって務めた京都市美術工芸学校嘱託教授の職を退いた鉄斎は、38年には発足より携わってきた美術団体（日本南画協会、後素如雲社）主催の展覧会への出品を辞して、画壇との関係に終止符を打った。鉄斎は70歳にして、ようやく読書三昧の自適の生活を手に入れたのである。

在野の文人となっても、精力的に創作活動に取り組み、1月早々には6曲1双からなる《富士遠望図・寒霞渓図》（京都国立近代美術館蔵）を描きあげた。右隻に富士山、左隻に寒霞渓をそれぞれに配した図は、鉄斎が50年来培ってきた画業修練の成果が発揮された大作で、賛には中国の画論を引きながら自らの信条を述べ、款記に「古稀　鉄斎外史」と署名する。また8月盂蘭盆会の日には、法然上人の遺戒「一枚起請文」の擬古文の形式を成す《画道一枚起請文》（No.12）を制作した。誓約を立て、自らの手印を捺していることから、画道に対する真摯な姿勢と新たな決意が伝わってくる。古稀の年は鉄斎の画業において、転機の年であったと考えられる。

なお鉄斎は70歳代から、款記に年月日に併せて年齢を記すことが多くなり、80歳代になると明記するようになる。こうしたことは人生万事、まず大切なのは長寿であるという信条を、自らをして表しているのだろう。

喜寿・甲子による年齢表記　中国の古典を尊んだ鉄斎は、わが国独自の慣習である喜寿、傘寿については「俗習」であるとして、さほど心に留めていなかったようである。とはいえ、明治45年（1912）に「七十七の齢」を迎えた鉄斎に、周囲は挙って喜寿を言祝いだ。鉄斎はこうした人々の厚意に感謝し、《喜寿書沙鍋》（No.75）といった「喜寿」や「寿」の書を揮毫して返礼の品とした。そして、自らの賀寿を祝しては《福禄寿図》（清荒神清澄寺 鉄斎美術館蔵）を描き、賛には「私は、すでに古稀を越え、さらに七年を加え、七十七歳になった。喜の草書体が七十七と読めるので、これを喜寿と称し、また祝宴を開いた。喜んで『詩経』の「南山の寿の如し」という句に因んで南山の景色を描いた。私の風采容貌は寿老人に似ている」との自作詩を寄せた。すなわち山中の庵室で寛ぐ寿老人は、鉄斎自身であるというのである。

太政官布告令により太陰暦が廃止され、我が国でも太陽暦が施行されることになり、陰暦明治5年12月3日をもって6年1月1日と改められた。幕末生まれの鉄斎は、生涯数え年を用いたが、暦法上の過渡期にあって、年齢表記を太陰暦に基づく中国の古典のなかに探求し、自らの作品や箱書で用いるようになる。

《青緑山水図》（清荒神清澄寺 鉄斎美術館蔵）は、鉄斎77歳の筆になる6曲1双の大作であるが、款記には「明治歳閼壬子六月　四百五十八甲子叟　鉄斎外史」と自署される。これは『春秋左氏伝』襄公三十年の項、絳縣老人が師曠に年齢をたずねられ、「私は正月甲子の朔の生まれで、それから四百四十五回の甲子がめぐり、その最後の甲子の日から二十日たった」と答えた逸話に倣った年齢表記である。算出法は、60日で干支が循環することから1年360日を六甲子とし、6で割ると満年齢になり、残りの端数は一甲子をふた月として計算する。明治から大正に改元される前後に、鉄斎はこの甲子による年齢表記に気づき、以降、《乗桴浮海図》（No.32）、《大国大神神影》（No.36）など、多くの作品に用いている。

耄耋・美寿　大正4年（1915）の1月、80歳を迎えた鉄斎は、月のなかで2羽の兎が餅つきをする《月中兎影図》（『鉄斎研究』16号-21）を干支にちなんで描き、その款記に「耄耋　鉄斎外史」と署した。耄耋とは老人に対する称で、鉄斎はこの年より「80歳の老人」の意である「耋」の字を自らの落款に用いるようになる。同年同月に描かれた《寿老人図》（『鉄斎研究』27号-17）には、「八十の老の至りをてつとよぶ銕をば書かへ耋斎とせむ」の歌を詠み、80歳を記念して自ら刻した「耋道人」印（No.80）を捺している。

こうした我が国では耳慣れない長寿の雅称を、鉄斎は好んで用いている。大正7年立冬に描かれた《山高水長図》（No.29）の款記には、「美寿叟　鉄斎外史」とある。美寿とは83歳の称で、前漢の劉向が著した『新序』雑事四に収録される、麦丘の村人が桓公に年齢をたずねられ、83歳と答えたところ、「美哉寿乎」と言ったという逸話に拠っている。この年の12月23日、嗣子の謙蔵が46歳で逝去した。鉄斎は自身の長寿とは相反して、子供たちには先立たれるという悲運とも向き合っていた。

米寿　米寿とは88歳のことで、「米」の字が八十八から成ることに由来している。

大正12年（1923）正月、鉄斎は88歳になった。「また新年を迎えて私は八十八歳になった。子供らが酒をすすめてくれるので、頻りににこにこ笑う。御覧なさい、太平の世のしるしを。私は聖朝にあらわれた寿老人なのだ」と、自らを今の世の寿老人であるとして描いた《寿老図》（No.49）には、「米寿　鉄斎外史」と自署される。長杖を持った寿老人が手にする桃は不老長寿を表し、蝙蝠は蝠が「福」に音通することから幸福を意味する。同趣の図様は、《南極仙図》（No.53）にも用いられている。

奇しくもこの年は、鉄斎の米寿に加えて妻春子も喜寿を迎え、さらに金婚式であることから、懇意の人たちが祝宴を催してくれた。これに対して鉄斎は、自らの賀寿を祝って制作した《貽笑墨戯》（『鉄斎研究』21号-8）画帖の精巧な複製を作り、「貽咲墨戯」と題して返礼の品とした。また手狭であった住居を新築して「曼陀羅窟」と命名し、その扁額を中国最後の文人と称される呉昌碩に依頼した。鉄斎は呉昌碩の篆刻を高く評価して、晩年「東坡同日生」印（No.81）などの印を愛用している。

そして、大阪の髙島屋で開催される「富岡鉄斎米寿作品記念展」（大正14年1月）のために、名品34点を揮毫した。記念画集『米寿墨戯』には、《一瓢千金図》（No.52）、《観瀑滌心図》（No.56）、《吉祥聚叢図》（No.57）はじめ、巻末には自作の和歌「筆の毛のほそきをおのが命にて八十八年をつなぎつるかな」（《寝言書》清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵）が収録されている。このように鉄斎は米寿の年を忙しく過ごした。

34　輞川雪景図

「九十落款」　鉄斎は大正13年（1924）12月31日、数え89歳で逝

去するが、この年の8月頃から、作品に「九十翁」あるいは「時年九十」などと自署し、また「九十翁」印（No.92、93）を用いるようになる。

最晩年の仙境図の一つである《蓬莱仙境図》（東京国立近代美術館蔵）には、漢学者の長尾雨山が箱書に「鉄斎翁、八十九歳の夏秋以後、作る所の款に九十と書す。蓋し陰暦を以てし閏月を加算すれば、則ち已に九十に達せるなり」とする。これは注年月日を起算点として朔晦（1年に朔が12回、晦が12回あるので、24朔晦をもって1年とし、閏月のある年は26朔晦となる）を加算する年齢表記のことで、「九十落款」の根拠とされている。朔晦による年齢表記は80歳代から用いられ、「二千五十四朔晦叟」と署される《茂松清泉図》（No.33）、《輞川雪景図》（No.34）などの作例がある。

「九十叟　鉄斎」の署名がある《扶桑神境図》（No.73）には、絶筆《栄啓期図》（『鉄斎研究』21号-11）と同じ自作詩が賛に寄せられている。その意は「私も隠者で、しかも行年九十、太平の世に遭って栄啓期のように、多くの楽しみを受けた幸福者である。この世界の万象を揮毫して、自然界のあらゆる現象をわが師としているのだ」である。平均寿命が50歳にも満たなかった時代にあって、鉄斎は89年の長寿を全うする。長い人生のなかで、宇宙自然の法則に従いながら、森羅万象を捉えることが自らの使命であるという境地に鉄斎は至ったのだろう。

鉄斎が天保7年（1836）に生まれてから4回目の丙申の年に、生誕180年「鉄斎－われ、丙申に生まる－」展を開催することは意義深いものと考えている。数え61歳から最晩年の「九十落款」までの名品の数々をお楽しみいただければ幸いである。

（柏木知子／当館学芸員）

≪出 品 目 録≫

［書　画］

番号	名　　称	制作年		年　齢	寸　法	材質・技法	員　数
1	売茶翁対客言志巻	明治17	1884	49	26.7×360.0	紙本墨書	1巻
2	還暦祝寿図	明治29	1896	61	45.1× 62.1	紙本淡彩	1幅
3	闔家全慶図	明治30	1897	62	各136.5×133.0	紙本着色	2曲1双
4	寿山福海図	明治32	1899	64	各127.8× 50.1	絹本着色	3幅対
5	闔家全慶図	明治33	1900	65	103.5× 48.7	絹本着色	1幅
6	華甲図	明治35	1902	67	119.5× 27.6	紙本墨画	1幅
7	五岳真形図	明治36	1903	68	31.1×140.8	紙本着色	1巻
8	七福遊戯図			60代	30.0×192.8	紙本着色	1巻
9	十二生肖図巻			60代	27.2×136.3	紙本着色	1巻
10	百事如意図			60代	42.0× 97.6	絹本着色	1面
11	朱寿老図	明治38	1905	70	124.9× 30.9	紙本朱画	1幅
12	画道一枚起請文	明治38	1905	70	29.1×275.6	紙本淡彩・墨書	1巻
13	飲中八僊図	明治39	1906	71	148.0× 53.4	紙本淡彩	1幅
14	観世音菩薩像	明治39	1906	71	137.8× 70.5	紙本淡彩	1幅
15	寿山福海図・神仙採薬図	明治40	1907	72	各128.4× 40.7	絹本着色	対幅
16	椿石霊鳥図	明治40	1907	72	127.0×108.5	紙本着色	1面
17	薬王菩薩像	明治45	1912	77	151.5× 41.6	紙本墨画	1幅
18	荘子八千椿図	明治45	1912	77	142.0× 42.0	絹本着色	1幅
19	古石長椿図	明治45	1912	77	150.3× 41.7	絹本着色	1幅
20	富士山図	大正1	1912	77	50.8× 61.7	紙本墨画	1幅
21	長椿古石図	大正1	1912	77	133.0× 60.0	紙本墨画	1幅
22	僊窟煉丹図			70代	28.0× 34.2	絹本着色	1面
23	万世不易平安城図	大正4	1915	80	54.6× 67.8	紙本墨画	1幅
24	鳳鳴朝陽図	大正5	1916	81	143.0× 41.6	絹本着色	1幅
25	多福多寿多男子図	大正5	1916	81	17.4× 53.1	紙本着色	1面

番号	名　　称	制作年		年　齢	寸　法	材質・技法	員　数
26	祝慶扇　松林図・梅林図	大正5	1916	81	各 16.2× 48.5	紙本金地着色	2本（扇子）
27	蘇子笠屐図	大正6	1917	82	146.4× 61.0	紙本淡彩	1幅
28	鍾馗嫁妹図	大正7	1918	83	19.5× 57.9	絹本着色	1面
29	山高水長図	大正7	1918	83	142.6× 51.3	絹本着色	1幅
30	東瀛僊苑図	大正7	1918	83	74.9× 85.8	絹本着色	1幅
31	葛井故宅図	大正8	1919	84	116.5× 42.2	絹本着色	1幅
32	乗桴浮海図	大正8	1919	84	165.4× 50.0	絹本着色	1幅
33	茂松清泉図	大正8	1919	84	153.5× 51.1	絹本着色	1幅
34	輞川雪景図	大正8	1919	84	133.6× 64.4	紙本淡彩	1幅
35	東坡捫腹図	大正9	1920	85	129.6× 31.3	紙本淡彩	1幅
36	大国大神神影	大正9	1920	85	127.6× 43.7	紺紙金泥	1幅
37	蓬莱群僊会図	大正9	1920	85	190.5× 58.4	紙本淡彩	1幅
38	歳寒二雅図	大正9	1920	85	132.3× 33.6	紙本淡彩	1幅
39	東坡謁仏印図	大正9	1920	85	133.0× 33.6	紙本淡彩	1幅
40	布袋遊戯図	大正10	1921	86	130.4× 31.5	紙本墨画	1幅
41	空山静境図	大正10	1921	86	141.2× 41.0	絹本着色	1幅
42	東坡笠屐図	大正10	1921	86	16.2× 53.0	紙本淡彩	1面
43	歳朝図	大正11	1922	87	132.6× 32.4	紙本淡彩	1幅
44	漁父会飲図	大正11	1922	87	132.6× 32.1	紙本着色	1幅
45	赤壁四面図	大正11	1922	87	155.6× 42.7	紙本淡彩	1幅
46	利市三倍図	大正11	1922	87	134.0× 32.5	紙本淡彩	1幅
47	東坡閑居図	大正11	1922	87	131.3× 31.8	紙本淡彩	1幅
48	東坡閑居図	大正11	1922	87	153.5× 42.8	紙本着色	1幅
49	寿老図	大正12	1923	88	132.5× 32.0	紙本着色	1幅
50	双寿搗餅図	大正12	1923	88	129.5× 33.2	紙本淡彩	1幅
51	武陵桃源図	大正12	1923	88	155.5× 43.0	絹本着色	1幅
52	一瓢千金図	大正12	1923	88	133.0× 32.2	紙本淡彩	1幅
53	南極仙図	大正12	1923	88	133.1× 32.2	紙本淡彩	1幅
54	雲山化城図	大正12	1923	88	133.5× 33.5	紙本墨画	1幅
55	層巒僊閣図	大正12	1923	88	146.5× 40.3	紙本墨画	1幅
56	観瀑滌心図	大正12	1923	88	131.8× 32.0	紙本墨画	1幅
57	吉祥聚叢図	大正12	1923	88	131.3× 44.9	紙本淡彩	1幅
58	山水図・蔬菜図	大正12	1923	88	各 16.4× 49.8	紙本淡彩	2本（扇子）
59	寿老歓酔図	大正12	1923	88	176.1× 48.5	紙本淡彩	1幅
60	普陀落山観世音菩薩像	大正12	1923	88	128.3× 30.4	紙本墨画	1幅
61	掃塵山荘図	大正12	1923	88	131.5× 31.8	紙本墨画	1幅
62	宝来船図	大正12	1923	88	132.3× 32.0	紙本墨画	1幅
63	瀛洲僊境図	大正12	1923	88	135.3× 51.5	絹本着色	1幅
64	寿老人像	大正13	1924	89	134.6× 33.2	紙本着色	1幅
65	猿猴捉月図	大正13	1924	89	131.0× 32.1	紙本墨画	1幅
66	富士山図	大正13	1924	89	34.8×126.5	紙本墨画	1面
67	仏法僧鳥図	大正13	1924	89	16.6× 54.8	紙本淡彩	1本（扇子）
68	瓶菊図	大正13	1924	89	16.6× 53.8	紙本着色	1面
69	墨龍図	大正13	1924	89	16.3× 53.0	紙本墨画	1面
70	千歳桃図	大正13	1924	89	131.8× 33.3	紙本着色	1幅
71	蓬莱山図	大正13	1924	89	144.8× 39.2	紙本淡彩	1幅
72	瀛洲僊境図	大正13	1924	89	142.6× 40.2	紙本着色	1幅
73	扶桑神境図	大正13	1924	89	144.5× 39.3	紙本着色	1幅
74	文人多癖帖	大正13	1924	89	各 27.0× 35.0	紙本淡彩	1帖

［器　玩］

番号	名　　称	作　者	制作年		年　齢	寸法（縦×横×高）	員　数
75	喜寿書沙鍋	深草平右衛門造 富岡鉄斎書	大正1	1912	77	35.9×35.9×7.1	1口
76	仁者寿字磁印	富岡鉄斎造			70代	5.3×　5.3×4.7	1顆
77	汲桶挿花器	富岡鉄斎書	大正12	1923	88	上辺19.5　下辺15.7　高26.9	1口

［所用印］

番号	名　　称	刻　者	制作年		材　質	寸法（縦×横×高）	員　数
78	「売茶八十翁」印		江戸時代		桑漆	2.8×2.8×3.3	1顆
79	五岳真形図印	山本拝石	明治4	1871	寿山石	2.9×2.1×6.4	1顆
80	「盞道人」印	富岡鉄斎	大正4	1915	黄蝋石	2.8×2.8×7.0	1顆
81	「東坡同日生」印	呉昌碩	中華民国6	1917	豆汁凍石	2.6×2.7×6.7	1顆
82	「惟丙申吾以降」印	桑名鉄城	大正7	1918	寿山豆汁凍石	1.7×1.2×3.2	1顆
83	「惟丙申吾以降」印	桑名鉄城	大正7	1918	寿山彩凍石	8.3×2.8×7.1	1顆
84	「丙申生」印	園田湖城	大正9頃	1920頃	斑寿山石	2.5×2.5×6.4	1顆
85	「八十五安」印	園田湖城	大正9	1920	黄色寿山石	2.7×3.0×7.3	1顆
86	「八十六安」印	園田湖城	大正10	1921	斑寿山石	2.0×2.0×5.5	1顆
87	「八十七叟」印	園田湖城	大正10	1921	斑寿山石	2.1×2.0×5.6	1顆
88	「八十八翁」印	園田湖城	大正12	1923	斑寿山石	2.1×1.8×4.2	1顆
89	「八十八翁」印	奥村竹亭	大正12	1923	葡萄石	4.1×4.2×8.8	1顆
90	「八十九翁」印	園田湖城	大正13	1924	斑寿山石	2.4×2.4×7.0	1顆
91	「甲子八十九」印	園田湖城	大正13	1924	斑寿山石	2.0×2.0×7.3	1顆
92	「九十翁」印	園田湖城	大正13	1924	白蝋石	2.8×1.3×2.9	1顆
93	「九十翁」印	園田湖城	大正13	1924	木	2.9×2.5×6.2	1顆

・出品作品は期間中、下記の通り2回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。
　前期：9月6日(火)～10月16日(日)　　後期：10月21日(金)～11月27日(日)

・下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。
　9月17日、10月1日、29日、11月12日　各土曜日の午後1時30分より

・鉄斎美術館　次回展覧会
　「鉄斎の器玩－四季を愛でる－」
　　2017年1月5日(木)～2月12日(日)

・鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館聖光文庫共催企画展
　「富岡鉄斎の妻・春子－歌をよみ、土にあそぶ－」
　　2016年12月4日(日)～2017年2月9日(木)
　　開室時間：午前10時～午後5時
　　休 館 日：水曜、第2金曜、年末年始（12月28日～1月4日）
　　会　　場：宝塚市立中央図書館聖光文庫《入場無料》

清荒神清澄寺　鉄 斎 美 術 館　〒665-0837　宝塚市米谷字清シ一番地
ＴＥＬ（0797）84－9600
ＦＡＸ（0797）84－6699
http://www.kiyoshikojin.or.jp

平成28年9月1日　印施